

# 観賞用メダカの養殖における収容密度について

農林総合研究センター（水産研究所）

キーワード：メダカ、養殖、密度、成長、生残率

## 1 技術の特徴

観賞用メダカは、家庭で手軽に飼育できて親近感があることから人気が高まっており、県内でもメダカの生産・出荷量が増えてきている。メダカの養殖は、他の観賞魚に比較して取り揚げや給餌管理に係る労力が少ないため、高齢者や小規模経営者からベテラン生産者まで幅広く取り組まれている。こうした中、生産者からは、効率的な養殖を行うためにはどの程度の収容密度で生産を行ったらよいか、という質問が多い。

そこで、より多くのメダカを生産するための収容密度や、出荷調整を行うための収容密度について明らかにした。

## 2 技術内容

### (1) 収量を重視した収容密度

ふ化から 60 日後の生残率は、500 尾/㎡が 68.8%、1000 尾/㎡が 56.3%、2000 尾/㎡が 68.4% であり、2000 尾/㎡でも 500 尾/㎡と差が認められなかった（図 1）。このため、収量性を重視する場合は、収容密度を 2000/㎡程度と多くするのがよい。

### (2) 成長を重視した収容密度

平均体長は、500 尾/㎡が 20.1mm、2000 尾/㎡が 15.4mm であり、500 尾/㎡の方が約 5 mm 大きかった（図 2、写真）。しかし、体長のばらつきには差が認められなかった。これらのことから、成長の促進を図って早期の出荷を目指す場合は、500 尾/㎡などの低密度で生産する方が有利である。

### (3) その他

本技術は、ヒメダカにおいて開発した技術であるが、他の品種でも適用可能であると考えられる。

### 3 具体的データ

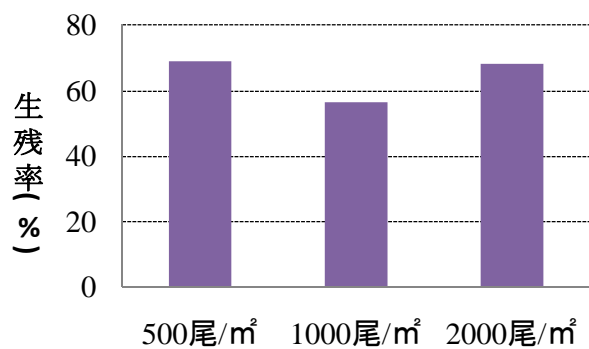


図1 収容密度の違いによる生存率比較

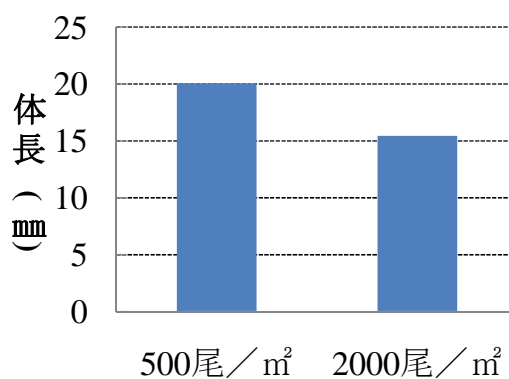
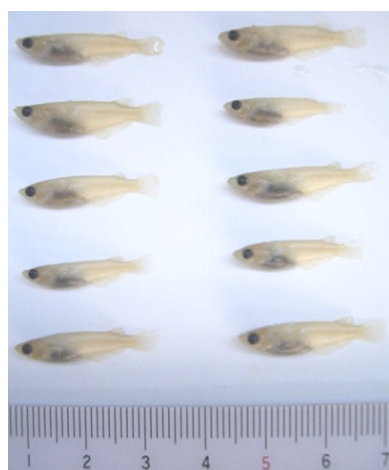
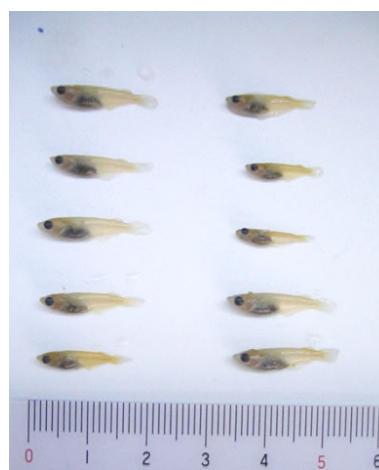


図2 収容密度の違いによる体長比較



**500尾/m<sup>2</sup>**



**2,000尾/m<sup>2</sup>**

写真 収容密度の違いによる成長比較

### 4 適用地域

メダカの養殖が行われている全域

### 5 普及指導上の留意点

餌の与えすぎには注意する。必要に応じて給水を行い、適切な池水環境を保つ必要がある。

### 6 試験課題名（試験期間）、担当

観賞用メダカ養殖実用化技術開発（2008～2010）、養殖担当